

加藤 弘之 提出 学位申請論文

『幕末政局と一橋徳川家』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、幕末政治史上一橋慶喜が注目されるにもかかわらず、その権力の基盤となった幕末の一橋徳川家についてほとんど研究がなかったことに着目し、御三卿一橋徳川家の邸臣団の形成と特徴、さらに幕末における邸臣団の変貌と軍制改革、草莽の士の登用・編成を考察している。かつ幕末政局における一橋慶喜の権力基盤についてその特質の一端を明らかにし、慶喜の政治的動向と「一会桑」の問題に新たな視点を見出し、幕末政治史研究における通説的理
解に問題提起した論稿である。

本論文は、序章、第Ⅰ編「邸臣団の構造と幕末政局」四章、第Ⅱ編「軍制改革と草莽の登用」四章、および終章から構成される。

序章では、「一会桑」の研究史とその特徴に触れ、幕末京都において朝廷の管
理や朝幕間の媒介に政治力を持った「一会桑」、すなわち一橋慶喜・会津藩主松
平容保・桑名藩主松平定敬から構成された勢力について、研究が不十分なのは
一橋徳川家の考察が不足しているからと論じ、一橋徳川家研究の重要性を主張
している。

第I編第一章「一橋徳川家の成立と邸臣」は、御三卿のひとつ一橋徳川家の
成立事情と、邸臣が幕府から付属された「付人」で構成され、次第に幕臣の「付
切」、一橋家が独自に邸臣とする「抱入」が増加するが、上級邸臣が「付人」で
占められるという邸臣団の特徴を検討する。第二章「付人の性格と慶喜の側近」
は、近世中後期の「付人」の特質を家老・用人を中心に論じ、また幕末の当主
慶喜と用人との関係を考察し、大名家臣とは異なる一橋家邸臣の性格を明らか
にしている。従来の御三卿研究では、上級邸臣が幕府から出向した付人により
占められ、当主の邸政運営に対する意志を制約する面が注目されていたが、筆
者は、幕末に慶喜の政治行動を支えた側近に付人が多いことに注目し、当主が

付人に対して一定の人事権を有していると論じている。

第三章「將軍後見職辞表にみる一橋慶喜の政治行動」では、慶喜が文久三年（一八六三）五月から六月にかけて、四度にわたり將軍後見職の辞任を朝廷に上申した経緯を考察している。將軍家茂の上洛と攘夷実行を迫られるなか、將軍後見職として江戸に帰った慶喜は、その回避を日論んだが、それは自ら数度の辞表を提出しつつ、攘夷不作為の責めを幕府有司に負わせることで、政局の隘路を切り抜けようと謀ったものと推論している。かつその過程で、付人出身の側近である平岡四郎・中根長十郎が、政局の工作に関与していたことにも言及している。

第四章「幕末期京都における用談所」では、慶喜在京中の元治元年（一八六四）から慶応二年（一八六六）頃まで、一橋家で情報収集、諸藩士や朝臣との折衝を担った用談所について検討している。用談所の中心であった調方頭取の川村恵十郎は、諸藩士や朝臣と深く接触する中で、当時の世論に近い政見を有するようになったという。しかし、当時の用談所は当主慶喜に直接上申する権限がなく、

側近である用人層に阻まれ、周旋活動の成果を慶喜の政治行動に反映させることはできず、用人層に権力が集中しやすい一橋徳川家の邸政構造が、用談所の活動を抑圧する側面があったと主張している。

第Ⅱ編第五章「軍制改革以前の軍制」では、幕末の軍制改革開始前、文久三年頃の軍制を中心とした邸臣団の構造を概観している。御三卿一橋家は、大名と異なり軍役の負担はなかったが、幕末期には既存の邸臣を編成して出陣に備える必要が出て軍制が整えられた。その特徴として、①足軽層の絶対数が少ないこと、②士分の禄高が低いことを明らかにしている。さらに特徴の①が、その後の領知からの大量の歩兵徴発につながる条件となり、②が近代的軍制のもとで士官に再編成しやすい階層であったことを指摘し、次章で検討する軍制改革への前提を提示している。

第六章「軍事編成と夫人・歩兵の徴発」は、歩兵の徴発と鉄砲組・大砲組への編成を中心とした軍制改革の様相を明らかにしている。文久・元治期の京都における一橋家は、幕府の陸軍等から附属された兵力に大きく依存していたが、

幕府における兵賦徴発と同様に、関東の領知からの大規模な兵卒徴発を実施した。それは局地的には、徴発に対する忌避や身分制との撞着を生じることとなったものの、概ね順調に実施され、慶喜の直属軍事力強化に貢献したと結論づけている。一方、賦役的性格に基づく領民の徴発のみならず、在野の有志の登用も平行して実施した。その中心となったのが、渋沢篤太夫（栄一）および彼が徴募した有志であったことを論じている。

第七章「元治元年関東領知における有志徴募」は、渋沢による有志の徴募の過程を検討し、彼らの多くが攘夷実行の旗手としての慶喜に、大きな期待を寄せる草莽の志士ともいふべき者たちであることを明らかにしている。

第八章「一橋徳川家の草莽登用と彰義隊の結成」は、幕府瓦解ののち彰義隊結成の中核となったのは元一橋家邸臣であることを考察するとともに、彼らが従来からの一橋家邸臣ではなく、多くは文久〜慶応期に新規に登用された草莽の者たちであったことを論証している。かつ彰義隊が、一橋徳川家を媒介として成立した草莽集団としての性格を濃厚に有していたと結論づけている。

終章では、幕末期の一橋邸政は、独裁型当主に適応した機構であり慶喜の政治行動を忠実に支えていたこと、長州戦争において強力な武器となる直属軍事力の確立に成功したことをもって、幕末期の一橋徳川家を、一橋慶喜の有力な権力基盤たりえたものと評価している。さらに課題として、第一に一會桑権力論の再定義、第二に慶喜の宗家相続後の政治行動の解明、第三に一橋徳川家の有志徴募を徳川方権力と草莽集団との関係のなかで位置づけること、第四に、慶喜の持つ特異な権威についての考察を挙げ、それが幕末政局に如何なる影響を与えたのか明らかにしたいと論じ、今後の研究への展望としている。

論文審査の結果の要旨

幕末維新研究における幕府および佐幕派諸勢力の研究は、一九七〇年代前後から次第に増えていき再評価が進んだ。このなかで脚光を浴びてきたのが、「一會桑」といわれた一橋慶喜・会津藩主松平容保・桑名藩主松平定敬が集合した

勢力であり、京都における幕府勢力を代表し、朝廷と幕府との結合を媒介する政治勢力とされている。ただしその研究は、一会桑を政治的に主導したのが一橋慶喜としながらも、その軍事力は会津・桑名藩に依存したとされ、またそれを支えた機構として会津藩公用方などが検討されているものの、一橋慶喜を支えた一橋徳川家の権力基盤や機構、軍事体制などについてはほとんど着手されていない。

本論文の筆者は、幕末政局の中で一橋慶喜を支えた一橋徳川家の御三卿としての特殊な邸臣機構、さらに一橋徳川家が軍制改革を行い、軍事力を強大にしたことが、慶喜の政治的行動の基盤となったと考え、一橋徳川家の邸臣団の特徴と幕末の機構、軍事編成を検討し、併せて機構や軍事編成の中で登用された草莽の士に着目している。

序章では、「一会桑」の研究史とその特徴に触れ、研究が不十分なのは一橋徳川家の考察が不足しているからと論じ、一橋徳川家研究の重要性を問題提起しており、首肯できる意見である。

第I編のうち第一章では、一橋徳川家の成立事情と、上層の邸臣が幕府から付属された「付人」で占められるという邸臣団の特徴を論じ、第二章では、近世中後期の「付人」の特質を家老・用人を中心に論じ、また幕末の当主慶喜と用人との関係を考察して、従来の御三卿研究において幕府からの干渉によって上層の邸臣が送り込まれ、当主の意志を制約したという通説を批判している。興味深い指摘ではあるが、八代將軍吉宗の子である初代宗尹、一一代將軍家齊の実父である二代治済、幕末に將軍後見職となった慶喜という、それぞれの時代の政治的状況を考察に加えながら、一橋徳川家と幕政との関係について画期を策定して検討する必要がある。

第三章では、慶喜が文久三年五月から六月にかけて、四度にわたり將軍後見職の辞任を朝廷に上申した経緯を考察している。將軍後見職である慶喜が、勅命による攘夷実行を回避しようと、責任を幕府有司に転嫁しながら数度の辞表を提出していたと論じている。緻密な論証であり、慶喜の政治的性格を窺わせる論考として評価できる。ただし一会桑成立以前の時期でわずか三か月程度の

検討であり、この論考を本論文の主題である一会桑の問題に如何に繋げていくのか、本論文の中で位置づけるのには一工夫必要である。

第四章は、一会桑が成立・展開する時期、一橋家において情報収集、諸藩士や朝臣との折衝を担った用談所についての検討である。用談所の調方頭取の川村恵十郎を中心にその動向を考察するとともに、用談所に当主慶喜に直接上申する権限がなく、側近である用人層に阻まれ、活動の成果を慶喜の政治行動に反映させることができなかったと指摘している。一会桑の情報収集や他藩・廷臣との折衝については、会津藩公用方の研究が知られているが、一橋徳川家の周旋活動を解明した貴重な論文であり、一方で用談所の意見が用人に阻まれて慶喜の政治活動に反映していないという一橋徳川家の邸政構造の指摘は、一会桑の政治活動を考えるうえで今後の検討が必要な問題といえる。

第Ⅱ編第五章では、幕末の軍制改革開始前、文久三年頃の軍制を中心とした邸臣団の構造を初めて明確にした論考であり、諸大名の軍制と比較しながら一橋徳川家の邸臣団の特質をも指摘している。また特徴として足軽層が少なく士

分の禄高が低いことを挙げ、その性格から後に領知からの大量の歩兵徴発および士分が近代的軍制の士官へ再編成される条件を論じ、軍制改革への前提を提示していることは評価できる。

第六章は、第五章の指摘を考察し、歩兵の徴発と鉄砲組・大砲組への編成を中心とした軍制改革の様相を解明し、各地の一橋家領知からの大規模な兵卒徴発について考察し、この軍制が慶喜の軍事力強化につながったと結論づけており、慶喜の軍事力に言及した数少ない論文といえる。さらに七章では、関東において渋沢篤太夫（栄一）が兵卒徴発の中心におり、在野の有志の登用も行われたことを指摘しており、彼らの多くが攘夷実行の旗手としての慶喜に、大きな期待を寄せる草莽の志士であるとともに、慶喜の徳川宗家相続によって一橋家邸臣から幕臣に編入されていく過程は興味深い。

第八章では、彰義隊の結成の中核となった元一橋家邸臣が、従来からの邸臣ではなく、多くは文久〜慶応期に新規に登用された草莽の志士たちであり、かつ彰義隊が、一橋徳川家を媒介として成立した草莽集団であったと結論づけて

いる。ただ幕末政局の問題とは離れており、彼らの存在を幕末政局に如何に位置づけるのかは、今後の課題であろう。

終章では、幕末期の一橋徳川家の機構が慶喜の政治行動を忠実に支え、また直隸軍事力の強化によって、一橋慶喜の有力な権力基盤たりえたものと結論づけ、今後の展望を提起しており、一橋徳川家の邸臣の構造と、その軍事力の分析、徵募の過程で登用された草莽の士を考察した論文として筋の通った結論となっている。

幕末政局の研究で重要な課題とされている一会桑の研究の中で、一橋慶喜の権力基盤としての一橋徳川家邸臣団の分析を、地道に続けた成果であり、今後の研究に寄与するところが大であると評価できよう。ただし筆者自身の展望にあるように、残された課題も多い。

一橋徳川家邸臣団の分析では、近世中後期から幕末までの幕政と一橋徳川家との関係を、画期を策定して位置づけければ、邸臣団の構造と変容が明確になったはずである。また一橋徳川家の軍制改革の論考は、他にない筆者の成果であ

るが、軍事力の強化とはいっても本陣を守護する親衛隊としての編成であって、前線で敵と戦う戦闘部隊ではない。これを軍事力の増大と評価できるのかは、これから検討が必要であろう。かつ、一橋徳川家の軍事力が長州戦争を契機に確立したというが、一会桑は長州戦争の終息にむけた対立で崩壊していくとされておられ、一会桑の問題に軍事力を如何に位置づけるのかは大きな課題である。さらに登用された草莽の士が、一橋慶喜の政治運営や権力基盤に位置づけられ活動できたのかも、本論文の筋道を考えれば今後分析が必要であろう。もちろん以上の問題は今後の課題であり、一橋徳川家の邸臣団の構造と軍制改革、草莽の士の登用・編成を考察し、慶喜の権力基盤を解明して「一会桑」研究に新たな問題を提起した意義は大きい。

よって本論文の筆者加藤弘之は、博士（歴史学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和二年十二月二十七日

主查	國學院大學教授	根岸茂夫	印
副查	國學院大學教授	吉岡孝	印
副查	東京大学史料編纂所教授	箱石大	印